

# 京都学校の記

福沢諭吉

青空文庫



明治五年申さる五月朔ついたち日、社友早矢はやし氏とともに京都にいたり、名所旧跡はもとよりこれを訪とうに暇いとまあらず、博覧会の見物ももと余輩よはい上京の趣意にあらず、まず府下の学校を一覧せんとて、知る人に案内を乞い、諸処の学校に行きしに、その待遇きわめて厚く、塾舎・講堂、残るところなく見るを得たり。よつて今、その所見の大略を記して、天下同志の人にしめすこと左の如し。

京都の学校は明治二年より基もとを開ひらきしものにて、目もつ今こん、中な学がく校がうと名なづくる者四所、小こ学がく校がうと名なるもの六十四所あり。

市中を六十四区に分て学校の区分となせしは、かの西洋にていわゆるスクールヂストリツクトならん。この一区に一所の小学校

を設け、区内の貧富貴賤を問わず、男女生れて七、八歳より十三、四歳にいたる者は、皆、来りて教を受くるを許す。

学校の内を二に分ち<sup>わか</sup>、男女とところを異にして手習せり。すなわち学生の私席なり。別に一区の講堂ありて、読書・数学の場所となし、手習の暇に順番を定め、十人乃至十五人<sup>ないし</sup>ずつ、この講堂に出でて教を受く。

一所の小学校に、筆道師<sup>ひつどうし</sup>・句読師<sup>くとうし</sup>・算術師、各一人、助教の数は生徒の多寡にしたがつて一様ならず、あるいは一人あり、あるいは三人あり。

学校、朝第八時に始り午後第四時に終る。科業は、いろは五十韻より用文章等の手習、九々の数、加減乗除、比例等の算術にい

たり、句読は、府県名・国くにづくし・尽・翻訳の地理・窮理書・経済書の初歩等を授け、あるいは訳書の不足する所はしばらく漢書をもつて補い、習字・算術・句読・暗誦、おのおの等とうを分ち、毎月、吟味の法を行い、春秋二度の大試業には、教員はもちろん、平日教授にかかわらざる者にも、皆、学校に出席し、府の知参事より年寄にいたるまで、みずから生徒に接して業を試み、その甲乙に従て、筆、紙、墨、書しよじやく籍等の褒美ほうびをあたうるを例とす。ゆえにこの時に出席する官員ならびに年寄は、試業のことと、立会のことと両様を兼ねるなり。

小学の科を五等に分ち、吟味を経て等とうに登り、五等の科を終る者は中学校に入るの法なれども、学校の起立いまだ久しからざれ

ば、中学に入る者も多からず。ただし俊秀の子女は、いまだ五科を経ざるも中学に入れ、官費をもって教うるを法とす。目今この類の者、男子八人、女子二人あり。内一人は府下髪結かみゆいの子なりという。

各校にある筆道、句読、算術師のほか、巡講師なる者あり。その数およそ十名。六十四校を順歴して毎校に講席を設けること一月六度、この時には区内の各戸より必ず一人ずつ出席して講義を聴かしむ。その講ずるところの書は翻訳書を用い、足らざるときは漢書をも講じ、ただ字義を説くにあらず、断章取義、もつて文明の趣旨を述ぶるを主とせり。

小学校の費用は、はじめ、これを建つるとき、その半なかばを官より

たすけ、半は市中の富豪より出だして、家を建て書籍しよじやくを買い、残金は人に貸して利足りそくを取り、永く学校の資しとなす。また、区内の戸毎こごごとに命じて、半年に金一步ふを出ださしめ、貸金の利足りそくに合がっして永続ついえの費ついでに供せり。ただし半年一步の出金は、その家に子ある者も子なき者も一樣に出ださしむる法なり。金銀の出納すいとうは毎区の年寄にてこれを司り、その総括をなす者は総年寄そうとしよりにて、一切官員のかかかわるところにあらず。

前条の如く、每半年各戸に一步の金を出ださしむるは官の命なれども、この金を用るもちうにいたりては、その権まったく年寄の手にあり。この法はウエーランド氏經濟書中の説に暗合せるものなり。

小学生徒の数、毎校少なきものは七十人より百人、多きものは

二百人より三百人余。学校の内、きわめて清楚、壁に疵きずつくる者なく、座を汚す者なく、妄語せず、乱足せず、取締の法、ゆきとどかざるところなし。かつ学校の傍かたわらにその区内町会所の席を設け、町役人出張の場所となして、町用を弁ずるの傍に生徒の世話をも兼ねるゆえ、いつそうの便利あるなり。

四所の中学校には、外国人を雇い、英仏日耳曼ゼルマンの語学を教えり。その法は東京・大坂に行わるるものと大同小異。毎校生徒の数、男女百人より二百人、その費用はまったく官より出いず。中学校の内、英学女工場じょこうじょうと唱となうるものあり。英国の教師夫婦を雇おつとい、夫は男子を集めて英語を授け、婦人は児女をあずかりて、英語の外にかねてまた縫針ほうしんの芸を教えり。外国の婦人は一人なれども、

府下の婦人にて字を知り女工に長ずる者七、八名ありて、その教授を助けり。

この席に出でて英語を学び女工を稽古する児女百三十人余、七八歳より十三、四歳、華士族の子もあり、商工平民の娘もあり。おのおの貧富にしたがつて、紅粉こうふんを装い、衣裳を着け、その装よそおい潔きよくして華ならず、粗こにして汚れず、言語嬌きよう艶えん、容貌温和、ものいわざる者も臆おくする気なく、笑わざるも悦ぶ色あり。花の如く、玉の如く、愛すべく、貴むべく、真まに児女子の風を備えて、かの東京の女子が、断髪素顔、まちだかの袴はかまをはきて人を驚かす者と、同日の論にあらざるなり。

この学校は中学の内にもっとも新あらたなるものなれば、今日の有

様にて生徒の学芸いまだ上達せしにはあらざれども、その温和柔順の天稟てんぴんをもつて朝夕英国の教師に親炙しんしやし、その学芸を伝習し、その言行を聞見し、愚痴固陋ぐちころうの旧習を脱して独立自主の氣風に浸潤することあらば、数年の後、全国無量の幸福をいたすこと、今より期して待つべきなり。

小学校の教師は、官の命をもつて職に任ずれども、給料は町年寄の手より出ずるがゆえに、その実は官員にあらず、市井しせいに属する者なり。給料は、区の大小、生徒の多寡によりて一様ならず。多き者は一月金十二、三両、少き者は三、四両。官員にて中小学校にかかわる者は、俗務の傍に、あるいは自己の志をもつて教授を兼ねる者多し。総員二十名を出でず。等級によりて月給同じか

らず。多きは七十両、少なきは十五両乃至二十両、平均一人につき二十五両に過ぎず。二十人にて一月五百両なり。官の費用少くして事務よく整うものというべし。

明治五年申<sup>さる</sup>四月学校出版の表によるに、中小学校の生徒一万五千八百九十二人、男女の割合およそ十と八とに等し。年皆七、八歳より十三、四歳。いまより十年を過ぎなば、童子は一家の主人となりて業を営み、女子は嫁<sup>か</sup>して子を生み、生産の業、世間に繁昌し、子を教うるの道、家に行われ、人間の幸福、何物かこれに比すべけん。今年すでに一万五千の数あり、明年に至らば、また増して三万となり、他の府県もまた、この法にならつて学校を建てざる者なかるべし。

しからばすなわち、爾後じご日本国内において、事物の順序を弁じ、一身の徳を脩め、家族の間を睦しくせしむる者も、この子女ならん。世の風俗を美にして、政府の法を行われ易からしむる者も、この子女ならん。工を勤め商を勧め、世間一般の富をいたすものも、この子女ならん。平民の知徳を開き、これをして公に民事を議するの権を得せしむる者も、この子女ならん。自から勞して自から食らい、一身一家の独立をはかり、ついに一国を独立せしむる者も、この子女ならん。広く外国と交をまじわり結び、約束に信を失わず、貿易に利を失わしめざる者も、この子女ならん。概してこれをいえば、文明開化の名を實にし、わが日本国をして九鼎きゅうてい大たい呂りよより重からしめんには、この子女に依頼せずして他に求むべ

きの道あらざるなり。

民間に学校を設けて人民を教育せんとするは、余輩、積年の宿志なりしに、今、京都に來り、はじめてその實際を見るを得たるは、その悦よろこび、あたかも故郷に歸りて知己朋友に逢うが如し。おおよそ世間の人、この学校を見て感ぜざる者は、報国の心なき人というべきなり。

明治五年申五月六日 京都三条御幸町の旅宿松屋にて

福沢諭吉記



# 青空文庫情報

底本：「福沢諭吉教育論集」岩波文庫、岩波書店

1991（平成3）年3月18日第1刷発行

底本の親本：「福沢諭吉選集 第3巻」岩波書店

1980（昭和55）年12月18日第1刷発行

入力：田中哲郎

校正：noriko saito

2007年11月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

# 京都学校の記

福沢諭吉

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>